

10 家族病理学的アプローチ

- 家族問題への関心: 封建遺制と夫婦家族理念との葛藤
→家庭裁判所の調停の場に持ち込まれた問題群
- 1970 家族病理学の誕生: 社会解体論、逸脱論、価値葛藤論
- 1980 家族問題、家族病理論の最盛期: 離婚、非行、サラ金、不登校、過疎地の自殺、育児不安、各種依存症
- 1990 家族問題研究の衰退: 1)認識の転換、2)病理学への批判 3)逸脱というよりはあまりにも一般化

家族問題の諸理論

- 家族解体論:組織化→解体→再組織化の生活過程の視点 家族員の発達段階に応じて、家族は変わるべきだが、
 - 1)過干渉:親離れさせない→問題行動
 - 2)偽相互性、仮面家族→非行の一般化
 - 3)家族の資源不足、力不足:大人になりきれない親とか
- 逸脱行動論:
- Merton anomie :文化目標と制度的手段との関係の破綻
- Sutherland sub culture: 異文化との接触、差異の学習
- Goffman stigma labeling
- 逸脱の基準 1)統計的基準:マイノリティが好ましくない
- 2)規範的基準:道徳・価値はかなり個人や集団によって異なる

家族病理の視点・現在の動向

- 家族病理の視点の有効性:離婚家族(関係の発展的解消になるか、子供にとって有益か)、夫婦家族の行き過ぎ
- 家族問題のノーマライゼーションなどと言わせない
- 清水批判1)病理→生理対処モデルへ(解体は病理でない?離婚・不登校どこが健全だ!斜に構えるな)
- 2)集団→個人モデルへ(個人パラダイムとは何?自己本位主義とどこが違う?未熟さをなぜ擁護する?)
- 3)家族の変化が社会全体の変化を要請する(それは分かるが、家族の理念・実質が危機にさらされたアメリカの現状は目をおおうばかり!)
- 要するに、家族病理研究は、家族を差別するものではないが、病理現象の発生メカニズムを把握するなかで、家族のあり方、社会のあり方を理念的に探求するべき。